

『学会開催報告』

第16回へき地離島救急医療研究会
学術集会The 16th Conference for emergency medicine in
rural areas and isolated islands cytochemistry金沢大学医薬保健研究域医学系血液情報発信学
(救急医学)

稲 葉 英 夫

わが国には未だ多くの医療過疎地域があり、医師不足・救急医療体制の不備などに起因する不十分な救急診療を改善するために、医師供給システム、医師研修システム、傷病者搬送システムを検討し、よりよいへき地・離島医療を実現することを目的に平成9年(1997)年にへき地離島救急医療研究会は設立されました。この度、第16回へき地離島救急医療研究会学術集会を平成24年10月27日に金沢大学附属病院宝ホールで、会長として開催しました。

学術集会には、全国のへき地離島救急医療に関係する医師、看護師、救急隊員などが90名参加し、活発な討論を繰り広げました。徳之島徳洲会病院からは、骨盤骨折に対するTAE(経カテーテル的動脈塞栓術)を数年来行っていない病院で、常勤放射線科専門医もいない、常勤整形外科専門医もいない、必要物品もそろっていないという、“ないない尽し”の状況の中で、ショックを伴う骨盤骨折に対する院内マニュアルの紹介があった。活水女子大学看護学部からは、長崎県の「アイランドナースネットワーク」事業の紹介と派遣者を受け入れた離島の看護職員の思いを分析した発表がなされた。短期派遣者を受け入れた側の看護職員は、人手が増えることによる様々な恩恵を感じていること、人手が外部から短期間供給されるということによるメリットと負担が明らかにされた。倉敷芸術科学大学 生命科学部からは、わが国の災害時多目的船(病院船)の検討の現状が紹介され、本格的な多目的船舶への建造に至ることはなく経過している現状が明らかにされた。被災地に高速でアクセスし、被災者500名程度を早期に収容できる2000~4000tの双胴船で、ウォータージェット推進機能で航行し、ヘリポートやホバークラフト導入も可能な船舶が有効であると主張がなされた。宇治徳洲会病院からは、鹿児島県離島医療の現状の分析が報告され、人口が減少しても、ニーズがある限り、医療を提供するとの発言には、感銘を受けた聴衆者が多かった。名瀬徳洲会病院産婦人科からは、奄美群島の周産期医療における情報通信技術(携帯型胎児心拍モニター装置)の導入と効果が紹介され、携帯型胎児心拍モニター装置の導入が胎児の救命に有効であるばかりか、妊婦の安心感への移行が得られることが報告された。群島内の周産期医療の安定性・安全性には、妊婦自身が持っている危機管理意識の向上が重要であることが再認識された。

へき地離島救急医療研究会では、研究支援を行なっている。昨年度、支援を受けた帝京大学医療共通教育センターの井上真智子さんから、離島診療所における医療サ

ービスの提供状況の調査と分析結果が発表された。財団法人日本離島センターの協力のもと、離島振興法等対象となっている全国305の離島を管轄する市町村(138カ所)に郵送および電子メールで調査依頼が行われた。診療対象人口の階層、離島の地理特性のより、提供状況が大きく異なることが示され、ソフト面のみならず、ハード面でも離島診療所は大きな問題を抱えていることが明らかにされた。

特別企画として、地域の質の高いバイスタンダーによる心肺蘇生法開始までの時間短縮を目的とした新たな救急体制の導入の試みが、自治医科大学医学研究科 救急医学 鈴木正之教授の司会で、システムの概要、栃木県茂木町での非番消防職員を活用した取り組み、石川県加賀市塩屋町での住民の自発的取り組みが紹介された。心停止患者の予後は、目撃から質の高い心肺蘇生が実施できる救急隊の現場(または患者)到着までの時間に強く依存する。救急隊到着に時間のかかる地域の院外心停止の予後を改善するためには、PA連携に加え、質の高いバイスタンダーを救急隊到着前に救急現場でリクルートするシステムが有効と考えられる。欧米では、このようなシステムは、地域のボランティアにより構築され、僻地の病院前救急医療の質の向上に役だっている。わが国でも、このようなシステムを導入する機運が高まり始めていることが明らかにされた。

午後からは、金沢大学大学院医学系研究科 医薬保健学域医学類 周産期医療専門医養成学講座 准教授 国際教育コーディネーター Andrew Schneider(アンドリュー・シュナイダー)先生をお招きし、へき地離島救急医療と医学教育に関する講演があった。へき地離島救急医療の医学教育には、十分な教育システムとプランを有するへき地(郊外)の一般病院での実習研修が必要であることが明らかにされた。また、ニューヨーク郊外のある町では、ライオンズクラブからの寄付により、救急車を購入し、よく訓練された住民ボランティアが、救急隊として、自主的に活動していることが紹介された。

以上のように、第16回へき地離島救急医療研究会学術集会はコンパクトながら内容の濃い学術集会となった。へき地離島救急医療研究会は、へき地離島救急医療学会に名称を変更することになった。次回の学術集会は、八戸市立市民病院救命救急センター所長 今 明秀先生を会長として、八戸で開催される。

